イノベーション普及と文化変容からみる環境と人間 —I

— 方法論の考察 —

阿山光利

1 目的と問題

日本人の特殊性を導き出すことから始まる「日本人論」の系譜も，時代の変遷，グローバリゼーションの進展から，現代では，「特殊性から普遍性へ」[1]の期にあたるとされている．まさに，グローバリゼーションの発展が，それぞれの文化の異質性を希薄化させ，収斂の方向に向かっているかのように印象づけられている．インフォームド・コンセントを含む医療の質（quality of life）の向上，男女共同参画の進展，高齢福祉の充実化，ボランティア意識や活動の普及，また一方では医療ミスの増加，現代の青少年犯罪の低年齢化・凶悪化など先進諸国の抱える内容と同様の議論がなされている観もある．

しかしながら，普遍性という視野で，現代の日本の抱える問題の所在さらに問題解決の方向を説明することが可能であろうか．人は，その成長過程において，遺伝的要因のみでなく，自らの生まれ育つ社会・文化的背景のなかで，態度や行動様式を習得していく存在である．今まさに，日本という文化に生まれ育ちながら，多くの外来の「もの」や「こと」を当然のように環境そして自己の中に取り入れている過程は，平面的な尺度や静態的な文化観で説明できるものではない．現代のような多様かつ複雑な関係性を紐解くには，人間がいかに社会・文化的存在であるかを今一度吟味し，その行動や動機に密接に結びついた「時の社会状況や文化の変化」を整理し直してみることが必要と考える．

そこで，新しいアイデアや物，概念の普及のあり方，その結果生み出される文化変容や社会変動の視点を包括するよりダイナミックな観点で捉えられることが必要と考え，ロジャース，E. M. のイノベーションの普及，宇野のイノベーションの普及および異文化間屈折論を軸に，文化変容や社会変動とともにある人間行動と動機を理解すべく，その方法論を学際的視野に立ち検討してみる．

今後の課題でもある，欧米に始まる終末期医療からの提示，ホスピスの進展とホスピス・ムーヴメントの普及，そしてWHOの推奨するパリアティブ・ケアが定着していくなかで，それらの概念や体制がいかに他の文化に取り入れられてきたのか，さらにその文化を変容させ，人々の「生と死」のとらえ方に影響を与え始めているかを捉えるうえで，方法論の1つとして

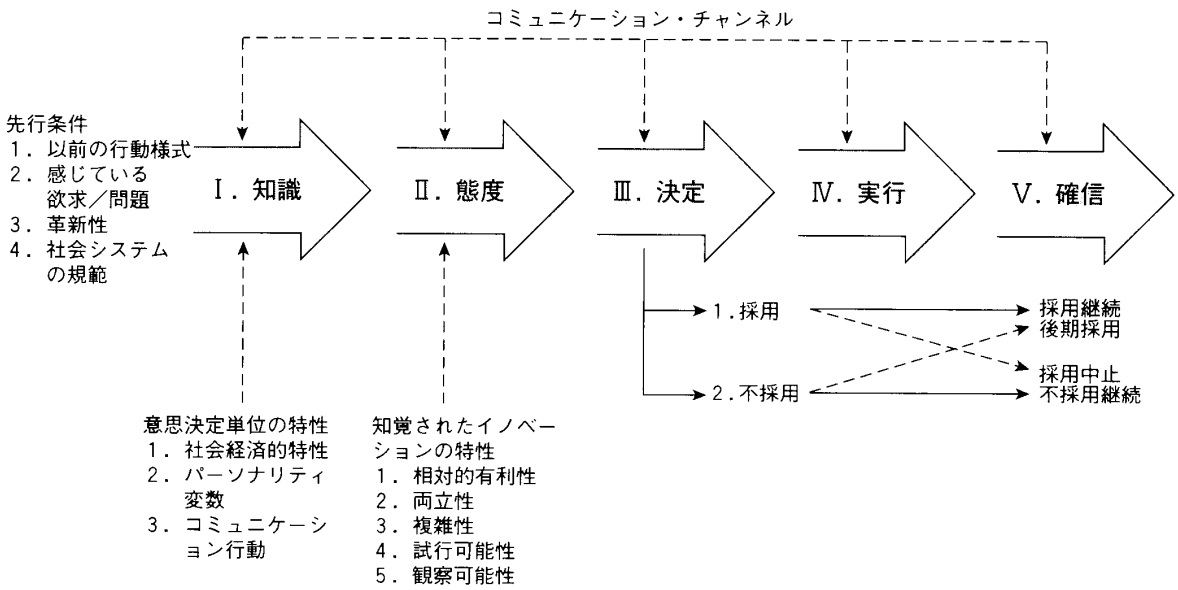
提示することに意義があると考える．

2 普及学におけるイノベーション

まず，普及学におけるロジャーズ, E. M. の定義に従うと，イノベーションとは，「新しいものと知覚されたアイデアや行動，または物である．人間行動を問題としているかぎり，そのアイデアが，最初の使用が行われた時や発見された時からの時間によって測られる客観的な新しさは重要ではないのである．そのアイデアに対する人の反応を決定するのは，彼によって知覚されたそのアイデアの新しさであり，主観的な新しさなのである．」[2]つまり，個人あるいはその他の（集団，組織体などの）採用単位によって「新しい」と知覚された「物や製品」「行動様式」「アイデアや概念」をいう．

このようなイノベーションが普及していく過程を，彼は，個人と集団のレベルにおいて分析し，「普及の個人過程のモデル」つまり個人によるイノベーション採用決定過程のモデル，と「普及の集団過程のモデル」つまり普及曲線と採用者カテゴリーのモデルを提唱している．ことに個人によるイノベーション採用決定過程（図２－１）は，全般にわたって心的活動であるが，なかでも採用決定後それを使用する段階である実行段階においては，従来，単なる模写や模倣と考えられてきた．しかし，彼自身がその段階における「再発明」[3]と呼んだように，イノベーションがもとのままの状態や形または内容でそのまま使用されるのではなく，この段階で

図２－１ イノベーション決定過程における段階のモデル（E.M.ロジャーズ）



イノベーション決定過程は，個人（もしくは他の意思決定単位）がイノベーションについての最初の知識を得てから，イノベーションに対する態度を形成し，採用もしくは拒否の決定を行い，新しいアイデアを実行し，そして，その決定を確信するまでの心的過程である．
簡潔にするため，このパラダイムではイノベーションの結果については示していない．

新たな状況や使用する者に適応するように，もとの形態や機能，意味内容を変えて使用されることが多く見出されている．

この現象は，日本においても中村元が『東洋人の思惟方法』全4巻にわたって，「普遍的宗教の変容」という表現を使っているように，まさに古代より「新たな宗教」というイノベーションが普及する過程において確認できるものである．仏教の受容，とくに仏教の伝播時における受容形態の変化に着目し，彼は「・・・思惟方法の特徴が仏教の受容形態をいかに規定し，またこの普遍的宗教をいかに変容せしめたか，またそれが後代にいかなる影響を及ぼしたのか，ということに重点をおいて考究しようと思う。」[4]と述べている．つまり，あるがままのすがたにおいて摂取するのではなく，摂取するにあたって，それを批判し，選択し受容した結果，「・・・・，シナ独特の，シナ人の思惟方法の限定を受けた仏教が成立した。」[5]と続けているように，彼は仏教というイノベーションそのものの変容を起こさせる原因および背景として，ある民族に共通に見出される「思惟方法」という心的活動を想定している．この民族の思惟方法を，言語の表現形式，さらに判断および推理の表現形式を手がかりに導き出そうとした中村の試みは，全面的に否定されるものではないが，サピアーウォーフの仮説に基づく言語の相違と文化の違いといった観点，論理的推論関係を捉えるための意味論の欠如などの限界から，新版では彼は「思惟方法と論理の問題」を削除している．とは言え，伝播・受容・定着における仏教の壮大な変容メカニズムの解明は他に類をみない．

さて，ロジャーズが導き出した「再発明」，中村の最も関心を示した「受容形態の変容」といった概念は，社会心理学の宇野の指摘する「異文化間屈折」という研究領域において総括的にとらえることができるものと考える．つまりある文化圏で生み出されたイノベーションが同一圏域内に普及する同一文化内普及，およびイノベーションが1つの文化圏から他の異文化圏域に横断して普及する異文化間普及と2種類の普及現象を，地理的空間と歴史的時間の経過をとおして解明しようとする分野である．ことに文化内容の構造の異質性の高い異文化圏域に，イノベーションが普及する場合，異文化性への文化横断的視野のみならず，文化的環境の影響を受けたパーソナリティ，動機，「未知なるもの」に対する不安要因など社会心理的視野の必要性が求められてくる．

3　異文化間屈折論

「異文化間屈折論」とは，イノベーションの普及に関して多くの実証的な研究実績をもつ宇野が，国際化時代の文化横断的研究の重要性を認識し，提唱した理論である．これは，ある文化圏に導入され普及するイノベーションが，その過程において，その文化圏のもつ文化的文脈によって屈折（変容）する現象に着目したところにこの特徴がある．この導入，普及における

屈折過程を分析することによって，その文化の特徴を見出していこうとするわけであるが，その場合，受容側のみでなく，送達側の文化も視野にいれている．

さて，ここで言うイノベーションとは，ある文化圏内にこれまで存在しなかったもので，次の3種類とそれらが混合されたものに大別されている[6]．

(1) 新しい呼称，新しい概念，新しい思想などにみられるように，新しい概念的アイデアが言語的に表現されたもの．

(2) 新製品やいわゆる発明品など，自然素材を人工的に加工したものにみられるように，物的に実現した新しいアイデア

(3) 儀式の仕方や食事作法，新しい制度やソフトウェアなどのように，人間行為の順序や様式を規定する新しい行為的アイデア．

まず，外来文化要素である外来のイノベーションは，先行条件としての文化的文脈に適合するように，つまり文脈的適合の過程において，脱落，添加，置換，融合などの種々の変化の様式を呈する．その結果，イノベーションそのものの内容が，形態，機能，意味などにおいて変化する．イノベーションそのものの変化は，その過程において一応終了するが，普及過程において，文化的統合，不当適応あるいは異端的排除といったイノベーションと文化的文脈との関係の変化が見られる．こういった過程を経て，社会の変動を促す条件が準備され，最終的には社会変動が進行し始め，このことが同時に文化的文脈に変化をもたらし，新しい文化的文脈を形成していくと考えられる．

ここでいう「文化的文脈」とは，特定の文化集合……行動様式において共通性をもつ社会集団……が発揮する方向性をもった場の力によって形成されているものとして定義されている[7]．1つの文化集合の中には，1つの文化的文脈が存在するのではなく，種々の文化的文脈が潜在的に存在し，それらが相互に関連しながら様々に組み合っていることが想定されている．こうして，ある文化集合内に，外来のイノベーションが持ち込まれると，これらの文化的文脈が顕在化し，イノベーションに作用すると考える．

次に「場の力」の定義をみると，それは自然的，社会的，歴史的要因によって成立する力とある[8]．これらのことから，まず行動様式において共通性をもつある社会集団が前提とされるわけである．そして，その集団の発揮する方向性をもった場の力が，その集団の文化的構造を維持しているからこそ，外来のイノベーションを屈折させて受容するのだと考えられる．その過程において，種々の文化的文脈が相互に関連しながらも，イノベーションの性質によって特徴的な現れ方をすると解せられる．

では，イノベーションの屈折に関与する人はどのように位置づけられるのであろうか．確かに，行動様式において共通性をもった社会集団を前提としている以上，屈折にかかわる者もその集団の特徴を共有する存在として位置づけられる．このことは，ある社会集団の成員の複数

成員性（pluralistic menbership）のために，究極的には，１つの民族，あるいは国家において共通の行動様式が想定されることを意味する．しかしながら，屈折事例から考えられることは，宇野も指摘するように，１つの国全体を特色づけるような全体的文化的文脈もあれば，その内部において，全体的な文化的文脈を種々の形で構成するような副次的な文化的文脈も観察することができる．

そこで，以下，異文化間屈折論の視野と内容を検証し，現代的意義をさらに見出す作業として，文化人類学，社会心理学，心理人類学，社会学諸分野からの「文化的存在としての人間」へのアプローチを参照し，総括を試みる．

4　文化と人間

人間は，自然の中の１個の生物であるという視点と同時に，社会生活の中で文化の影響とともにあり，文化をつくり，伝えていく存在であると考えられている．

歴史上の人物の心理をあつかう方法の必要を説いたリッケルト，H.や，実験室の心理学に対して歴史の理解や現代の人々の行動を理解するために別の心理学が必要であるとするマンハイム，K.らの言明は，「人間」を研究対象とする心理学への提言でもあった．また，ミード，G.H.が生理学的心理学に対して社会心理学を立て，ヴント，W.が心理学を個人心理学と民族心理学に分けたのも，人間の研究において２つのアプローチを必要とすると考えたからである．ミードにおいては，精神の営む思考過程を，シンボルを用いた社会的相互作用過程の内面化されたもの（I と me の対話）とみなしている点で，今日の象徴的相互作用論の源流と考えられている．

その後，1920年代後半から，米国において，人間の精神活動，特に住民の代表的なパーソナリティと生活様式の型，つまり文化の型との関連を研究する傾向があらわれた．ここに，「文化とパーソナリティ」研究がはじまったのであるが，その方向づけとなったのが，1924年に発表されたサピア，E.の「Culture, Genuine and Spurions」[9]であった．つまり，①文化とパーソナリティには密接な関係がある．②文化もパーソナリティもおのおの１つの統合体であり，それは研究者によって抽出されるものである．③子供の文化学習に注意する必要がある．これら３点こそ，「文化とパーソナリティ」研究の成立を根拠づけるもので，後に発表されたカーディナー，A.の基本的パーソナリティ構造，リントン，R.の基本的パーソナリティ型（身分的パーソナリティ）や，デュボア，C.のモーダル・パーソナリティに共通して見出される内容だからである．さらに所属する集団あるいは居住する特定の文化的な環境において共通に見られ，ある種の一貫性のある行動ないし性質を指し示している[10]．

他方，ベネディクト，R やミード，M に見られる「文化とパーソナリティ」研究の流れは，上

記の関係論的アプローチに対し，文化とパーソナリティの相同性を仮定する全体論的アプローチと呼ばれる．特にベネディクトは，１つの文化は個人と同じく多少一貫した思考・行動の類型であると言っているように，１つの文化を特定社会における人間行動の類型と考え，あくまでも１つの文化のユニークな統合性を重視している．その結果，彼女は，文化を担い，動かす人々の側の内面を注視する心理的学立場に立つ以上，文化の目に見える変化そのものよりも，それを越えてなお不変に存続する文化・パーソナリティの型の把握に止まってしまった[11]．

これらの文化とパーソナリティ研究は，その後，学習や経験のあり方における直線的な連続性，単一のパーソナリティつまり一様性，検証の困難な因果関係が仮定されているなどの指摘から[12]，発展的な体系に向かわず，より学際的志向をもつに至った．ただし，文化の特質に応じてその民族のパーソナリティが異なるとする考え，つまり特徴的なパーソナリティ類型への視点は，文化相対主義理解の上に立っていると言え，現代的意義があると考える．

ここに，文化と人間を把握するうえで重要となる３つの視点が浮き上がってくる．まず，パーソナリティが文化ほど相対的に捉えられてきたかという点（本文５）であり，また，文化変容を許容する文化形成のダイナミックス，あるいは歴史的過程への視座（本文６），さらに認知過程（結論）が併せて明らかにされてきたかといった点である．

5　パーソナリティ概念と文化相対主義

西洋人の「パーソナリティ」概念に対して，東洋人の「人（レン）」[13]という概念を導入したのは，心理人類学（Psychological anthoropology）を提唱したシュー，F. L. K. であった．彼は，それまで通文化的概念だとされていた“パーソナリティ”が，実際には極めて西洋文化に拘束された概念であったことを指摘している．つまり，フロイト，S. に代表されるように，個人の内部で起きる本能的衝動と社会的規範との葛藤が，下意識的なメカニズムによって調整されると考える立場，またオルポート，G. W. やマスロー，A. H. の主張するように，個人の生来的な潜在能力や可能性を仮定し，自己実現を指向すると考える立場などが，「エゴ」を中核にして構造化され，「エゴ」というパーソナリティ実体を暗黙の前提に据えているように思われると指摘し，「パーソナリティ」は個人主義に根ざす西洋の概念であると主張している．

もちろん，クーリー，C. H. やミード，G. H が主張するように，シンボリック相互作用論の立場では，個人が，発生する自分の自我意識のなかに，１つの社会的過程を取り入れることから，自我が社会的産物であることを示している．シューもまた，「パーソナリティ」実体説に対して，「パーソナリティ」過程説とでもいうべき立場を示唆している．これは，「パーソナリティ」を個人と彼の社会や文化との相互作用の生涯に至る過程として眺めようとするものであり，「個人中心のにんげんモデル」ではなく，対人的脈絡〔interpersonal nexus〕に焦点をお

く「社会中心のにんげんモデル」の設定を意味している[14].

図5—1 人間の心理社会図（F. L. K. シュー）

⑦ 無 意 識 界
⑥ 前 意 識 界
⑤ 表現されない意識界
④ 表現可能な意識界
③ 身近な社会と文化
② 操作的な社会と文化
① 遠隔の社会と文化
⓪ 外部世界

「パーソナリティ」

「人（JEN）」

上記の図[15]では，④③層を主幹とし，⑤②層の一部を含む領域を，「人間常相（human constant）」と呼び，中国語で人間を意味する「人」という概念名称を与えている．このように，コンプレックスや不安のような深い核を含む個人心理の内部で継起するものに強調を置く「パーソナリティ」に対し，シューは対人交渉〔interpersonal transactions〕に強調を置く「人」～自分と他人とは完全に分離できない，不分化のもの～を，社会＝文化的存在としての基本的分析単位にしようとしたのである．

6 文化変容と社会変動にみられる歴史的時間

パーソナリティ概念およびパーソナリティ形成における社会・文化的影響関係を眺めてきたが，環境としての社会・文化要因も決して一定かつ一様のものではない．

文化の変化とは，いわゆる「文化変化」のことであるが，場合によっては，「社会変化」や「社会変動」と必ずしも概念の上で明確に区別されていないようである．ただ，後者の場合は，社会体系における構造的，機能的側面に重点が置かれる時に用いられ，社会組織を文化の一部と考えて，「文化」に比重が置かれる場合には，「文化変化」という語が使われていると考えられる[16]．ところで，この文化の変化の要因を外部的なものに求めるか，あるいは内部的なものに求めるかによって，「文化変容（accultuation）」[17]（文化の借用〈パウエル, J. W.〉）という概念が導入されたのである．すなわち外部的な要因，つまり文化要素の伝播や異文化との接触によって起こる変化を「文化変容」と呼んでいる．

さて，文化人類学の吉田によると，文化変容に先立つ社会，文化体系の性質が文化変容を規制しているだけでなく，自然環境，人口などの要因や，接している文化相互の関係もまた影響

を与えていると考えられることから，文化変容には，文化接触の関係によって差が現れてくるという指摘がある[18]．また，ある社会の文化要素が他の社会に伝えられるときに，その文化要素はもとの性質とはかなり違ったものとして認知される傾向がある．つまり，異文化から伝えられた要素と，その認知や解釈の間には，フィルターのようなものが介在すると考えられるとも吉田は述べている[19]．

この「フィルターのようなもの」こそ，ロジャーズの言う「再発明」や宇野の「屈折」を引き起こす社会・文化的存在としての人間の思考や行動のあり方を指し示していると考えられる．ミルズ, C.J. によると，「動機は，それが適切な語彙となる一定の社会状況を離れてはなんの価値も持たない．動機は状況に結びつけられなければならない．　・・・動機は歴史的時期や社会の構造とともにその内容や性格が変化する」．[20]このミルズの見解は，動機を人々の個人生活史とその属する集団の社会史の両方に結びつけるわけである．また，シンボリック相互作用論の立場では，動機を基本的には言語表現にかかわる性質をもつものとして，そして行動の原因としてでなく，行動の一部である目的と関連させて考えようとする．こうして，動機は，行動を説明するものではなく，理解するために用いられている．すなわち，動機を社会的経験において学ばれ，集団によって異なり，社会的脈絡に関連するものと考えられている．

次に，外因の内因化によっても伴う，社会構造の変化つまり社会変動についても言及しておく．今日，社会構造という用語を使うとき，それを構成する要素は，社会的行為といったミクロな次元から，役割，組織・制度・体制といったマクロな次元にまでわたっている．しかし，社会変動の研究においては，通常，制度的・体制的な構造の変化をあつかっていると考えられる．また，社会変動の源泉・・変動をひき起こす刺激のもととなるもの（source of impetus to change）・・として，自然的，生態学的環境，人口，技術，資源などの変化，さらには外部社会からのインパクト，文化と個性の多様性など，その源泉は多元的に考えられている．

まず，社会体系それ自体の構造変動に至る過程を分析しようと試みたパーソンズ, T. は，社会変動の過程をひき起こす要因を，１つあるいは２つの独立した領域に求める立場ではない[21]．すなわち科学の発達，宗教上の思想の発展，遺伝体質の変化，自然環境の変遷など，変動において複数の誘因を想定している．また，彼は，変動の波及効果を追ってみることの重要性についても指摘している．すなわち社会体系の構造が，ある中間的な段階をとおして何から何へ変動しているか，その方向の特定化が可能であると考えている[22]．

また，社会を均衡体系と見るパーソンズに対し，ムーア, W.E. は社会をむしろ緊張—処理体系としてみる見解を示している[23]．すなわち，緊張が統合された社会体系の構造から生み出されるとするパーソンズに対し，彼は，緊張というものは社会体系の中ですでに内在しているものと考え，社会を秩序と変動，両者を併せ持つ全体としてみている．さらに変動の「質」・・小規模と大規模の変動を区別・・という概念[24]を導入し，社会変動の源泉および変

動の方向性の両面を明らかにしようとした.

他方，ニスベット,R.E.は，構造の内部における変化で，しかも社会構造の形態には影響を及ぼさない変化を，ムーアの小規模の変動に対応させていると考えられる．それに対し，社会変動と考えられるのは，まず，内部的な発展や外部からのインパクトによって，社会がその構造形態を変えるときに生じる変化であり，社会構造の均衡の「再調整」[25]と呼ばれるように，類型を維持させるための変化である．第2の種類の変化は，類型の持続とは明らかに両立しえないもので，「類型の変化」[26]と呼ばれる．これは，ある型の社会構造から他の型の社会構造への移行を示す変化であり，彼は，変化の源泉や方向性を社会構造の要素から引き出すことをせず，社会の変動の研究において，危機や偉大な人物の役割，さらに偶発的な出来事や状況といった歴史の領域を考慮に入れなくてはならないと主張している.

再びパーソンズの視野をみると，彼が，社会体系の内部にみられる変動過程と社会体系の体系としての変動過程を区別したのは，内部の変化が増大し，蓄積されていって，社会体系の体系としての変動につながっていく理論構築の手順のためであったが，社会体系内部の動機づけ過程の理論も必要条件であると主張している[27].

さて，社会の構造における動態的変化を理解しようとするならば，ミルズの論じるように，歴史的変動，いわば時代の構造の解明に向かわなくてはならない．また，歴史形成のメカニズムを考察する中井は，社会構造がある特定の時間幅において，他の社会構造へと移行する歴史形成諸要素間の因果関連をとらえることの重要性を主張している[28]．さらに，この時間的に移行するメカニズムの解明における内因および外因（他の集団や社会を前提としている），なかでも外因の内因化の視点は，示唆に富んでいる.「外因的なるものは，既存の社会がもつ特定の構造と，その特定の封鎖性，解放性にしたがって内因的なるものに転化し，既存の日常性の次元の体系に対して新たな規制要素として作用する，とみることができる」.[29]この視点は，社会構造の変化のみならず，文化変容さらにその変容とともにある文化的文脈によって性格づけられる動機をも包含するものと考える.

結　論

古来，人々は外来の文化を取り入れ，その結果生ずる文化変容のなかで様々な社会的経験を繰り返してきた．しかしながら，歴史的な時間幅とともにそれはもはや外因としてのあつかいではなく，内因化された社会文化環境であり，そこに「固有の文化」と結論づける傾向にもあった．現代の日本社会・文化においても，同様で，諸外国からのイノベーションをさらに導入の容易い社会状況のなかで活用し，グローバリゼーションの只中にいるかのように捉えられているように思われる．これは，イノベーションとしての思想や概念が，とくに文化的文脈の

異なる他の文化圏に導入され，普及するときに，それらが「再発明」あるいは「屈折」現象を起こしていても，時間幅の長短を問わず，その内容の変化に気づくことなく了解されてしまう傾向のあることを示していよう．

ところが実際には，文化＝（言語）＝国民性（民族性）といった尺度から，国民（民族）の差異性・特殊性を提示する時代は終焉したとされながらも，国際摩擦，異文化接触による文化変容，さらに異文化間屈折といった現象が，今現在も生じていることも事実である．近年では，「show the flag」論議で，翻訳可能性の問題とその語彙のもつ文化的背景の理解の重要性が指摘された．また自由主義・個人主義という概念も同様で，そこに表裏一体であるはずの「責任」に対する理解，また「個」の確立などの乏しさのなかで，ことばだけが広く許容されている現状は，まさに概念の屈折現象といえよう．

イノベーションは，そもそもその発生した文化圏において，既にその文化的文脈を顕在的もしくは潜在的に包含している．そのため，屈折現象は，受容者によるイノベーションに対する知覚的な単なる受動的イメージによってではなく，彼の属する文化による影響，つまり多層化された文化的文脈によって方向づけられた傾向を基点とし，予期される結果[30]によって動機づけられるという一連の認知過程をへて発現すると考える．これは，人間が環境から独立した一個の存在であるという認識から，自然・対人・社会・文化的環境（文化的文脈）のなかで成立（発達）する関係系の総体であるという認識へと向かわせる．

文化は，グローバリゼーションの進展するなかでいかに普遍化へ向かうと考えられようとも，イノベーションの屈折現象が認められるように，相対的かつ特徴的な要素をそれぞれに包含しているものであり，そこに人々の思考や行動がある．そして文化に密接に関連した動機，認知の過程を視野に入れることで，現代の医療福祉領域におけるホスピスやパリアティブ・ケア導入による「生と死」の捉え方，さらに青少年犯罪にみられるようなビデオ等の導入・普及による「恥と罪」に関する意識の変化や方向性を探ることが可能と考える．そのためには，固有と思われている文化項目，ならびに文化の差異を希少化してみる視点を再吟味し，イノベーションの屈折現象から文化項目の特徴的な顕在状況を確認することが必要であり，その作業をとおして，単なる比較文化論でない，予測を可能とする広いレンジの方法論が探求されることである．現代を知るには，網膜上に映しきれない深さを知ることであろう．

註

[1] 青木保：日本文化の変容，中公文庫，１９９９，pp.１３４～１６４.
[2] E.M.ロジャーズ：イノベーション普及学（青池愼一・宇野善康監訳），産能大学出版部，１９９０，p.１８.〈Everrett M.Rogers, Diffusion of Innovations, The Free Press, 1982.〉
[3] E.M.ロジャーズ：イノベーション普及学（青池愼一・宇野善康監訳），産能大学出版部，１９９０，pp.２５６～２６６.
[4] 中村元：東洋人の思惟方法　第２巻，春秋社，１９７９，p.４.
[5] 中村元：東洋人の思惟方法　第２巻，春秋社，１９７９，p.１４.
[6] 宇野善康・他共著：国際摩擦のメカニズム，サイエンス社，１９８２，p.３３.
[7] 宇野善康・他共著：国際摩擦のメカニズム，サイエンス社，１９８２，p.３４～４１.
[8] 宇野善康：普及学講義，有斐閣選書，１９９０，pp.２２４～２２５.
[9] E.Sapir：Culture Genuine and Spurions, Amer.J.Sociology 29, 1924, 401-29 (Selected Writings of Edward Sapir, ed. Mandelbaum, D.G. 1951, 308-331)
[10] 築島謙三：文化心理学基礎論，勁草書房，１９８０，p.２０２.
[11] 築島謙三：文化心理学基礎論，勁草書房，１９８０，p.２１６.
[12] P.K.ボック：心理人類学（白川琢磨・棚橋訓訳），東京創元社，１９８７，pp.１４９～１５７.
[13] F.L.K.Hsu：Psychological Homeostasis and Jen, Conceptual Tools for Advancing Psychological Anthropology, American Anthropologist 73-1, 1971, p.29.
[14] 浜口恵俊：日本らしさの再発見，日本経済新聞社，１９７９，pp.６７～７３.〈F.L.K.Hsu：Psychological Homeostasis and Jen, Conceptual Tools for Advancing Psychological Anthropology, American Anthropologisit 73-1 1971, pp.24～28.〉
[15] 浜口恵俊：日本らしさの再発見，日本経済新聞社，１９７９，p.６８.
[16] 吉田禎吾：宗教と世界観，九州大学出版会，１９８３，pp.４～５., p.２８.
[17] M.J.Herskovits：Man and His Works Knopf, New York, 1949, p.523.（1880年，J.W.PowellがAcculturationを「文化の借用」という意味で用いた.）
[18] 吉田禎吾：宗教と世界観，九州大学出版会，１９８３，pp.２２～２４.
[19] 吉田禎吾：宗教と世界観，九州大学出版会，１９８３，p.１１.
[20] C.W.ミルズ：状況化された行為と動機の語彙（田中義久訳），権力・政治・民衆（青井和夫他監訳），みすず書房，１９７１，pp.３４４～３５５.〈C.W.Mills：Situated Actions and Vocabularies of Motive, American Sociological Review, vol.5, 1940, pp.904-13.〉
[21] T.パーソンズ：社会体系論（佐藤勉訳），現代社会学体系１４，青木書店，１９７４，p.４８７.〈Talcott Parsons, The Social System, The Free Press, 1951.〉
[22] T.パーソンズ：社会体系論（佐藤勉訳），現代社会学体系１４，青木書店，１９７４，p.４８９
[23] W.E.ムーア：社会変動（松原洋三訳），至誠堂，１９７７，pp.１２～１４.〈W.E.Moore, Social Change, Prince-Hall, 1963.〉
[24] W.E.ムーア：社会変動（松原洋三訳），至誠堂，１９７７，pp.５７～８６.
[25] R.E.ニスベット：現代社会学入門３（南博訳），講談社，１９８０，pp.１８７～１８９.〈R.E.Nisbet：The Social Bond, Alfred A Knopf 1970〉
[26] R.E.ニスベット：現代社会学入門３（南博訳），講談社，１９８０，pp.１８７～１８９.
[27] T.パーソンズ：社会体系論（佐藤勉訳），現代社会学体系１４，青木書店，１９７４，pp.４７５～４８５
[28] 中井信彦：歴史学的方法の基準，塙書房，１９８１，p.２０５.
[29] 中井信彦：歴史学的方法の基準，塙書房，１９８１，p.２７４.
[30] U.ナイサー：認知の構図（古崎敬・村瀬旻共訳），サイエンス社，１９７８，pp.２００～２０６.